

古寺山の小さな谷の生きもの

渡辺昌造（兵庫県立大学 環境人間学研究科）

古寺山って？

神戸電鉄唐櫃台駅を降りて東南の方角を見上げるとなだらかな山が見えます。古寺山（ふるてらやま）と呼ばれるその山の頂には、源平の時代までは多聞寺というお寺があったそうです。いまでは「清盛の涼み岩」と称される大岩があるだけで、地元のひとにもあまり登られることが少ない静かな山です。

山頂から逢山峡ハイキング道への下り道に、井戸谷（いどだに）と名がついた小さな谷があります。傍らを細い水が流れていますが、ここを登り降りする人が落ち葉に埋もれた水の流れに注意を払う人はあまりいないでしょう。私はこの数年、この小さな谷に通ってひっそり暮らす生きものたちの観察を続けてきました。四季をおって紹介していくことにします。

井戸谷の四季

❁冬 沢すじが雪で埋もれつららが垂れ下る2月。ヒダサンショウウオが産卵のために水辺に現れます。あずき色の体に金粉をまぶした鮮やかさ。産み落とされた卵塊は見る方向によって微妙に色彩が変わるたえようのないブルーに息をのみます。気温が零下でも流れる水の温度は5℃くらいあって、凍てついた谷に見える流れの中にもさまざまな生きものが冬を過ごしています。

❁春 4月下旬の遅い春にシロバナショウジョウバカマがひっそりと白い花を咲かせます。切り立った滝の壁にへばりつくように生えています。谷すじは土石流の厳しい環境で他にはほとんど草花はみられません。すこし暖かみを感じるようになる5月。岩壁をミドリカワゲラの幼虫が這い上ってきて30分ほどで羽化して次々に飛び立っていきました。生命を感じる瞬間です。

❁夏 梅雨の時期にはガレ場のなかから「ンゴ、ンゴ」とタゴガエルが呼び合う声が聴こえてきます。砂利底には白いオタマジャクシが群れています。このころにはヒダサンショウウオの幼体があちこちでこのオタマを待ち受けている姿がみられるようになります。そして盛夏になると成体になったカエルをねらうマムシが水辺でとぐろを巻いています。谷に入ると夏の暑さを忘れますが、水は酒れ気味で落葉は黒く腐って水の生きものにとっては過ごしにくい季節かもしれません。

❁秋 コナラやタカノツメの葉がいつせいに谷を埋め尽くします。オオカクツツビケラの幼虫が落葉を刻んで鳥居形の巣を作ります。水の勢いも再び増して岩を滴る水を受け取るようにタニガワトビケラの巣の袋が並びます。

落ち葉の中をひとすくいとミルンヤンマやヤマトカワゲラなどの水生昆虫が、石の下にはサワガニやヘビトンボの幼虫が潜み、谷には常に新しいドラマが待ち受けています。

これからの夢

私はこの谷の生きもの観察を通してもっと深く生きもの生きざまや環境との関係について調べてみたくなり、いま兵庫県立大学大学院でオオカクツツビケラの生活史と生息環境について研究しています。また昨年11月には地元の山をめぐる仲間とともに「古寺山くらぶ」を結成して、古寺山の自然と歴史を地元地域の財産にしていきたいと考えています。古寺山が地元の人に身近に愛される山になればと願っています。